

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2018 年 8 月

「恐れるな、小さい群れよ」「預言の確かな言葉（1）」「信仰による義認とは何か?」「ラタトゥウ」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

預言の確かな言葉 (I)

4

聖書の教え

朝のマナ

恐れるな、小さい群れよ

6

Fear Not, Little Flock

現代の真理

「信仰による義認とは何か?」

38

神の憐れみの最後の招き

力を得るための食事

ラタトゥユ

46

お話コーナー

「これらのものを持って、ここから出ていけ」(II)

48

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465 FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール support@4angels.jp

発行日 2018 年 7 月 8 日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Sozai on Front page, Sermon View on page
38

Printed in Japan

アブラハムの最も熱心な祈りは答えられた

「あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでた。そしてそれを見て喜んだ」(ヨハネ 8:56)。

アブラハムは、約束の救い主を見たいと非常に望んでいた。彼は、自分が死ぬ前にメシヤを見ることができるようにと最も熱心な祈りをささげた。そして彼はキリストを見た。超自然の光が彼に与えられ、彼は、キリストのきよいご品性をみとめた。彼はキリストの日を見、そしてよろこんだ。彼は、罪のための天来のいけにえを見せられた。このいけにえについて、彼は、自分の経験を通して実例を与えられていた。「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れて……彼を燔祭としてささげなさい」との命令が彼に与えられた(創世記 22:2)。彼は、いけにえの祭壇に、約束の息子、一彼の望みの中心であった息子を置いた。それから、神に従うために、あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」という天の声を彼は聞いた(創世記 22:12)。この恐ろしい苦しみがアブラハムに負わされたのは、彼に、キリストの日を見させ、この世に対する神の愛、すなわちこの世を墮落からひきあげるためにひとり子を非常な屈辱的な死に渡されたほどの神の大いなる愛をみとめさせるためであった。

アブラハムは、神について、かつて人間に与えられた最高の教訓を学んだ。死ぬ前にキリストを見たいという彼の祈りは答えられた。彼は、キリストを見た。彼は、人間が見ても生きることのできる全部を見たのである。全面的に屈服することによって、彼は自分に与えられたキリストのまぼろしを理解することができた。神は罪人を永遠の滅びから救うためにひとり子をお与えになることによって、人間がなし得るよりもっと大きな、そしてもっとすばらしい犠牲を払おうとしておられるのだということを、彼は示された。(各時代の希望中巻 259, 260)

第6課 預言の確かな言葉 (I)

確かな言葉

聖書の真実は様々なかたちで確立されていますが、預言ほど説得させるものは他にありません。聖書の預言と歴史的な事実を、公正かつ客観的に比較する人はだれでも、預言が正確に成就していることに驚かされます。そして、創造主なくして創造がありえないように、「始めから終わりを知っておられる」神聖な知的存在者なくして、真の預言はありえないのです。

人が墮落する前は、神はエデンの園で罪のない夫婦と自由に会話されました。しかし、彼らの不従順の後には、人が神と顔と顔をあわせて語ることはできなくなりました。彼らの創造主の足音を聞いたとき、彼らは恐怖にとらわれ、身を隠したのでした。

「彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。そこで、人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した」(創世記 3:8)。

神が人に語られる

全能者が人に語られるとき、人はもはやそのお方を見ることはできなくなりました。「また言われた、『しかし、あなたはわたしの顔を見ることはできない。わたしを見て、なお生きている人はないからである』」(出エジプト記 33:20)。

しかし、彼らはなお神の声を聞き、答えることができました。「主はカインに言われた、『弟アベルは、どこにいますか』。カインは答えた、『知りません。わたしが弟の番人でしょうか』」(創世記 4:9)。

神のみ声が再び人間に聞かれたのは、このお方がシナイ山の頂上からイスラエルの子らの陣営に雷のように律法を響かせられた時でした。「言った、『われわれの神、主がその栄光と、その大いなることとを、われわれに示されて、われわれは火の中から出るその声を聞きました。きょう、われわれは神が人と語られ、

しかもなおその人が生きているを見ました。われわれはなぜ死ななければなら
ないでしょうか。この大いなる火はわれわれを焼き滅ぼそうとしています。もしこ
の上なおわれわれの神、主の声を聞くならば、われわれは死んでしまうでしょう。
およそ肉なる者のうち、だれが、火の中から語られる生ける神の声を、われわれ
のように聞いてなお生きている者があのでしょうか』(申命記 5:24-26)。

人類が罪に陥れば陥るほど、罪を憎まれる生ける神と人類が伝達をすることは
難しくなりました。「ただ、あなたがたの不義があなたがたと、あなたがたの
神との間を隔てたのだ。またあなたがたの罪が主の顔をおおったために、お聞き
にならないのだ」(イザヤ 59:2)。

罪は、神とわたしたちの間に立ちはだかる障壁です。しかし、わたしたちは墮
落し、罪深い者であるにもかかわらず、神は大いなる憐れみのうちに、わたした
ちをお忘れになりませんでした。

神の伝達方法

「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、
何事をもなされない」(アモス 3:7)。

これは、神が人類を捨てられたのではないことを保証する素晴らしい約束で
す。洪水やキリストの来臨などのような重大な出来事は、こうした厳粛な出来事
に備えるための警告として、それらが起こるよりもかなり前に預言者によって伝え
られたのでした。

これらの預言者とは、どのような種類の人々だったのでしょうか。だれでも、ち
ょうど自分で職業を選択するように、預言者になる資格が得られるのでしょうか。

「なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、
神によって語ったものだからである」(ペテロ第二 1:21)。罪が人間を神から分離さ
せたため、公然と罪の中で生活をする人はだれも創造主の代弁者となることはでき
ません。ただ神の御前に謙遜に歩み、日々真剣に自分の欠点を克服することを求
める人々だけが、その神聖な職務のために選ばれたのでした。神が彼らを選ばれ
たのは、その義なる生活のゆえでした。彼らは責められるところがありませんでした。
そこで神は、ご自分の警告や訓告を彼らにお与えになり、メッセージから足すこと
も引くこともせずに人々に伝えるという任務をお与えになったのでした。

恐れるな、小さい群れよ

Fear Not, Little Flock



「世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであったように、ごく小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立つならば、神は彼らの逃れ場となって下さる。彼らは全能の神の広い盾のもとに立つのである。」(患難から栄光へ下巻 296)

8 月

宇宙を帝国としておられる君主

「大祭司が〔使徒たちに〕問うて言った、あの名を使って教えてはならないと、きびしく命じておいたではないか。それなのに、なんという事だ。エルサレム中にあなたがたの教を、はんらんさせている。あなたがたは確かに、あの人の血の責任をわたしたちに負わせようと、たくらんでいるのだ。これに対して、ペテロをはじめ使徒たちは言った、人間に従うよりは、神に従うべきである。」(使徒行伝 5:27-29)

真理が人間の教理に相反し、彼らの不義の行いを罪に定めるので、それは最も苦い反対を起こすのである。大多数が、中にはキリストの名を担っている者たちでさえ、このお方の自己否定と十字架を負う模範に快く従わないのである。そして彼らがこのお方からますます遠ざかると、彼らは天の事柄と地上の事柄の区別をつけることができない。彼らの平安は、神に仕え、すべての罪深い行いを放棄する民がいるという事実によって乱される。(ヒストリカル・スケッチ・オブ・SDA ミッション 195, 196)

反対の道を進むようにとせきたてる他の声がわたしたちの四方にあるとき、主はわたしたちに義務の声に従うことを要求なさる。それは神から語られている声を識別するために熱心な注意を払うようにとわたしたちに要求している。わたしたちは聖霊の促しが止み、意志と衝動が支配してしまうことのないように、傾向に抵抗し、これに勝利して、交渉や妥協をすることなく良心の声に従わなければならない。主の言葉は、このお方のみ霊に抵抗せず、聞き従わないと決め込むようなことをしないわたしたちすべてに臨むのである。この声は警告のうちに、勧告のうちに、非難のうちに聞こえる。それはご自分の民に対する主の光のメッセージである。もしわたしたちがもっと大きな呼びかけ、またはより良い機会を待つなら、光は取り去られ、わたしたちは暗闇のうちに取り残されるかもしれない。

服従には十字架が伴うために、神の霊とこのお方のみ言葉の呼びかけに応じることを一度なおざりにすることによって、多くの者たちは多くを失ってきた一どのくらい多くかは最後の日において書物が開かれるときまで、彼らは決してわからない。快楽や傾向が反対方向に導くからといって、今日み霊の嘆願をなおざりにするならば、明日それは確信させる力も、あるいは印象づける力さえも無いかもしれないのである。即座に自発的な心で現在の機会を生かすことが、恵みと真理の知識において成長する唯一の道である。わたしたちは個人として、万軍の主の前に立っているという意識をつねに抱くべきである。どんな言葉も、行動も、思いでさえも、永遠のお方の御目の前に罪を犯すがままにすべきではない。その時、わたしたちには人への恐れや地上の権威への恐れはないのである。なぜなら宇宙を帝国としておられる王、わたしたち個人個人の現在と永遠の運命を手中に収めておられるお方が、わたしたちのすべてのわざを認知しておられるからである。(教会への証 5 卷 69)

8月2日

聖なる大胆さ

「ところが、国民全体に尊敬されていた律法学者ガマリエルというパリサイ人が、議会で立って、使徒たちをしばらくのあいだ外に出すように要求してから、一同にむかって言った、イスラエルの諸君、あの人たちをどう扱うか、よく気をつけるがよい。そこで、この際、諸君に申し上げる。あの人たちから手を引いて、そのなすままにしておきなさい。その企てや、しわざが、人間から出たものなら、自滅するだろう。しかし、もし神から出たものなら、あの人たちを滅ぼすことはできまい。まかり違えば、諸君は神を敵にまわすことになるかも知れない。そこで彼らはその勧告にしたがい、使徒たちを呼び入れて、むち打ったのち、今後イエスの名によって語ることは相成らぬと言いわたして、ゆるしてやった。使徒たちは、御名のために恥を加えられるに足る者とされたことを喜びながら、議会から出てきた。そして、毎日、宮や家で、イエスがキリストであることを、引きつづき教えたり宣べ伝えたりした。」(使徒行伝 5:34, 35, 38-42)

この著名なラビ〔ガマリエル〕の学識と高い地位は彼の言葉に重みを与えた。祭司たちは彼の見解の妥当性を否定することができなかった。彼らは仕方なく彼らの捕虜を鞭で打ち、イエスの名によって宣べ伝えることはもうしないように繰り返して命じ、そうしないなら彼らの命によって自分たちの大胆さの罰をばらわなければならないと命じた後、彼らを解き放った。しかし刑罰も脅迫も意に介されなかった。(パウロの生涯からのスケッチ 13, 14)

イエスは初期の教会の弟子たちに喜んで与えられたのと同様に、今日ご自分に従う者たちに勇氣と恵みを喜んで与えられるのである。だれ一人として無分別に闇の支配と権威と戦う機会を招くべきではない。神が彼らに争闘に携わるようにと命じられるとき、それは十分なときである。このお方は弱くためらう者に、大胆さと発言を彼らの望みと期待を越えて与えられるのである。

キリストに対して表されたのと同様な嘲りと憎しみが、今日このお方の共労者になるようにと明らかに選ばれた者たちに対して存在しているのが見られるであろう。真理の教理に対して起き上がる精神を持つ者たちは、キリストの僕たちの働きを大変なものとするのである。しかし神は彼らの怒りがご自分を賛美するようにされるのである。彼らは真理を調べるようにと思いを刺激することによって、このお方のご目的を達成するのである。神は一時の間は人々がご自分に反対して自分たちの悪の傾向に従うことを許される。しかし、ご自分の栄光のためとなり、またご自分の民の益となるのをごらんになると、このお方はあざける者たちを捕え、彼らの思い上がった進路をあばかれ、そしてご自分の真理に勝利をお与えになるのである。(預言の霊 3 巻 273)

わたしたちが地上の事柄について遠慮せずに語るのに、なぜわたしたちは永遠の関心について語るのにそれほど気が進まずにいるべきだろうか。すべての心が聖なる大胆さによって感銘を受けるようにと願う。わたしたちすべての者が勇氣をもって人々の前でイエスを掲げるようにと願う。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1882 年 3 月 16 日)

最初のクリスチャン殉教者

「さて、ステパノは恵みと力とに満ちて、民衆の中で、めざましい奇跡としるしとを行っていた。すると、……会堂に属する人々……などが立って、ステパノと議論したが、彼は知恵と御霊とで語っていたので、それに対抗できなかった。そこで、彼らは人々をそそのかして、『わたしたちは、彼がモーセと神とを汚す言葉を吐くの聞いた』と言わせた。その上、民衆や長老たちや律法学者たちを煽動し、彼を襲って捕えさせ、議会にひっぱってこさせた。」(使徒行伝 6:8-12)

ステパノは……自分の言葉が受け入れられないのを見て、最後のあかしをしていることを知った。彼が預言にキリストを結びつけ、また神殿について自分が語ってきたとおりに語ると、祭司は恐怖にとりつかれたふりをして、衣を裂いた。この行為はステパノにとって死が間近いことを意味する合図であった。彼は説教の途中であったが、突然、それをやめた。ステパノはそれまでたどってきた歴史の説明を突然中断して、激怒した裁判官らに向かい「ああ、強情で、心にも耳にも割礼のない人たちよ。あなたがたは、いつも聖霊に逆らっている。それは、あなたがたの先祖たちと同じである。いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、ひとりでもいたか。彼らは正しいかたの来ることを予告した人たちを殺し、今やあなたがたは、その正しいかたを裏切る者、また殺す者となった。あなたがたは、御使たちによって伝えられた律法を受けたのに、それを守ることをしなかった」と言った(使徒行伝 7:51-53)。

これを聞いた祭司や役人たちは怒りで逆上し、人間とは思えぬさまであたかも猛獣のように歯ざしりしながらステパノに突進した。ステパノは自分の周囲の残忍な顔を見て、自分の運命を悟ったが、たじろがなかった。死の恐怖は去っていた。彼は怒り狂った祭司も気の立った暴徒も恐ろしくなかった。目の前の光景は見えなくなった。彼には天の門が開かれていて、その中には、神の宮廷の栄光と、み座から立ち上がって、ご自分のしもべをささえようとしておられるキリストが見えた。……

ステパノの殉教を目撃した人たちはみな深い感動をおぼえた。それは教会にとって苦しい試練であったが、サウロが導かれたのはこのおかげであった。サウロは殉教者ステパノの信仰と忠誠、栄光をどうしても記憶から消すことができなかった。彼の顔に押された神の印章と、聞いた人々の心を動かした彼の言葉は、目撃者の心にいつまでも残って、彼が宣べ伝えていた真理のあかしとなった。(レビュー・アンド・ヘラルド 1911 年 2 月 23 日)

8月4日

サウロの改心

「ところが、〔サウロが〕道を急いでダマスコの近くにきたとき、突然、天から光がさして、彼をめぐり照した。彼は地に倒れたが、その時、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。そこで彼は、主よ、あなたは、どなたですか、と尋ねた。すると答があった、わたしは、あなたが迫害しているイエスである。さあ立って、町にはいつて行きなさい。そうすれば、そこであなたのなすべき事が告げられるであろう」。(使徒行伝 9:3-6)

サウロの心の闇を驚くべき光で照らしたのは、主のみわざであった。しかし弟子たちにも、彼のためにしなければならない働きがあった。……イエスは自分の義務について教会から教えてもらうことができるように、この尋ねているユダヤ人を彼らのところにお送りになった。キリストは啓示し罪を悟らせる働きをなさった。今この悔い改めた者は、神の真理を教えるよう任命された人々から、教える聞く用意ができていた。このようにイエスはご自分の組織された教会の権威を認可され、サウロを地上のご自分の代表者たちとのつながりに置かれたのである。天来の光の照明はサウロの視力を奪ったが、偉大な癒し主イエスは直ちに元に戻されなかった。すべての祝福はキリストから流れ出るが、このお方は今地上におけるご自分の代表者として教会を確立され、悔い改めた罪人を命の道に導く働きが教会に属しているのである。サウロが滅ぼそうと決意していたその人々が、彼が軽蔑し迫害していた宗教の教師となるのであった。

ダマスコのユダの家における断食と祈りの三日間、サウロの信仰は激しく試みられた。彼はまったく目が見えず、何が自分に要求されているかについて、思いの完全な暗闇のうちにあった。彼はダマスコに行くようにと指示され、そこで彼が何をするべきかが教えられるのであった。不確かさと悩みのうちにあって彼は熱心に神に叫んだ……

キリストはここに人の救済のために働かれるご自分の方法の実例を与えておられる。このお方はこのすべての働きを直接サウロのためになすことがおできになったが、これはこのお方のご計画と合致しなかった。このお方の祝福は、ご自分が任命された代理を通して来るべきであった。サウロは滅びをもうろんだ者たちに対して、告白のうちにすることがあった。そして神は、ご自分に代わって行動するようにとご自分が権威を与えられた者たちがなすための責任ある働きを持っておられた。

サウロは弟子たちに学ぶ者となった。律法の光のうちに彼は、自分自身が罪人であるのを見た。彼は無知において詐欺師と見なしていたイエスが神の民の宗教の創始者であり、土台であるのを見た。(パウロの生涯からのスケッチ 28-30)

8月5日

人里離れた所における祈りの三年間

「〔後にパウロとして知られたサウロは宣言した、〕母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった時、わたしは直ちに、血肉に相談もせず、また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行った。それから再びダマスコに帰った。その後三年たってから、わたしはケパをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間、滞在した。しかし、主の兄弟ヤコブ以外には、ほかのどの使徒にも会わなかった。」（ガラテヤ 1:15-19）

パウロは自分について聞いたすべての者たちに、自分の信仰の変化は衝動や狂信からではなく、圧倒的な証拠によってもたらされたことを実証した。彼が宮において働くにつれて、彼の信仰はますます強まった。ユダヤ人の激しい反対に直面して、イエスが神の子であることを支持することにおける彼の熱心さは増した。彼はダマスコに長い間留まることができなかった。なぜならユダヤ人たちが彼の素晴らしい改心とそれに続いた働きに対する驚きから回復した後、彼らはキリストの教理を支持して担うようにともたらされた圧倒的な証拠を断固として捨てたからである。パウロの改心に対する彼らの驚きは、彼に対する極めて激しい憎しみへと代わった。……

パウロの命は危険にさらされていた、彼は一時期ダマスコを去るようにとの命令を神から受けた。彼はアラビヤに行った。そして比較的人里離れたところにおいて、彼は神との交わりと瞑想のための十分な機会を持った。彼は自分の心を探り、自分の悔い改めを深め、祈りと学びによって、自分が引き受けるのにはあまりにも大きすぎあまりにも重要すぎるように思えた働きに携わるために自ら備えるために神と二人だけになりたいと願った。彼は人によって選ばれたのではなく、神によって選ばれた使徒であった……

アラビヤにいる間、彼は使徒たちと交信しなかった。彼は心を尽くして熱心に神を求め、自分の悔い改めが受け入れられ、自分の大いなる罪が許されたことを確かに知るまで安んじないと決心していた。彼は来るべき奉仕においてイエスが自分と共にいてくださるという確信を得るまで闘いをやめようとしなかった。彼は、キリストの栄光のしるしを体に、すなわち天の光によってかつて盲目になった自分の目におびて、つねに持ち運ぶのであった。そして彼はまたキリストの支えの恵みの確証をつねに担うことを願ったのである。パウロは天との緊密なつながりをもつようになり、イエスが彼と交わられた。（パウロの生涯からのスケッチ 33, 34）

8月6日

即座に行動する

「しかし、主の使がピリポにむかって言った、立って南方に行き、エルサレムからガザへ下る道に出なさい（このガザは、今は荒れはてている）。そこで、彼は立って出かけた。すると、ちょうど、……高官で、……宦官であるエチオピア人が、礼拝のためエルサレムに上り、その帰途についていたところであった。彼は自分の馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。御霊がピリポに『進み寄って、あの馬車に並んで行きなさい』と言った。……そこでピリポは口を開き、この聖句から説き起して、イエスのことを宣べ伝えた。」（使徒行伝 8:26-29, 35）

宦官は……光と知識とを求めて熱心に祈った。そして神は彼の祈りをお聞きになって、天使をピリポに送り、彼に真理に飢え渴いている一人の魂にキリストを宣べ伝える目的のためにガザに行くようにとお命じになった。

宦官はエルサレムにおいて、ナザレのイエスについて様々な相反する報告を耳にした。彼の思いはその問題について悩まされた。彼は聖書の写しを持っていて、ピリポが彼に会ったとき、メシヤに関する預言を熱心に学んでいた。彼らは見知らぬ者同士であったが、ピリポの思いはこの人が自分の助けを必要しているということを感じ取られた。ピリポは、馬車の傍を歩きながら、宦官に彼が読んでいる預言を理解しているかを尋ねた。彼は自分が指導を必要としていると答え、ピリポに自分の傍に座るようにと招いた。

彼が学んでいた聖句はイザヤ書 53 章 7 節であった。ピリポは彼の心の願いを理解し、預言に啓示されたイエス・キリストと、罪人を救うために地上にいられたこのお方の使命について宣べ伝えた。彼は改心において取る必要な段階―父の律法の違反のゆえの神への悔い改め、人の救い主としてのキリストのうちにある信仰、このお方の死と類似したバプテスマ―を彼に示した。宦官の心は光と真理を受け入れる用意ができており、ピリポによって宣べ伝えられた福音を喜んで受け入れた。……

この実例のうちに、ご自分の子供たちに対する神の保護の例証がある。このお方はサマリヤにおける成功した奉仕からピリポを、砂漠を渡って一人の探求している魂のために働くためにガザに行くように呼ばれた。宦官が福音を受け入れその信仰に従って行動した機敏さは、わたしたちにとって教訓となるべきである。神はわたしたちがキリストを受け入れ告白することにおいて素早くなるように、このお方に従うことにおいて、また義務の呼びかけに答えることにおいて素早くなるようにと計画された。宦官は評判がよく、高く責任ある地位を占めていた。彼の改心を通して福音は、エチオピアまで伝えられ、多くのものがキリストを受け入れた。（預言の霊 3 巻 304, 305）

祝福された使命

「ふたりが会堂を出る時、人々は次の安息日にも、これと同じ〔勧めの〕話をしてくれるようにと、しきりに願った。そして集会が終ってからも、大ぜいのユダヤ人や信心深い改宗者たちが、パウロとバルナバとについてきたので、ふたりは、彼らが引きつづき神のめぐみにとどまっているようにと、説きすすめた。次の安息日には、ほとんど全市をあげて、神の言を聞きに集まってきた。」(使徒行伝 13:42-44)

二人またはそれ以上の者たちが共に、福音伝道の働きに着手するようにさせなさい。彼らは働きの長から財政的援助を与えられるという、特別の励ましを受けないかもしれないが、それにもかかわらず、彼らに祈りながら、歌いながら、教えながら、真理を生きながら前進するようにさせなさい。彼らは文書伝道の働きにとりかかることができ、このようにして真理を多くの家族に紹介するのである。彼らが自分たちの働きのうちに前進しながら、祝福された経験を得るのである。彼らは自分たちの無力を感じることによってへりくだられるが、主は彼らの前に行かれ、裕福な者また貧しい者たちの間で好意と助けを得るのである。献身した宣教師たちの貧困でさえ、人々への通路を見出す手段である。彼らが自分たちの道を進みながら、多くの面において、自分たちが霊的食物をもたらすために来た人たちによって助けられるのである。彼らは神が彼らに与えられる使命を担い、彼らの努力は成功の冠を戴くのである。これらの慎ましい教師たちによらなければ、決してキリストに勝ち取られなかったであろう多くの者たちが、真理の知識に至らせられるのである。……

わたしたちの民は大いなる光を受けてきたが、牧会の力はほとんど諸教会のために費やされてきた。すなわち、教師となるべき者たちを教えるために、また「世の光」(マタイ 5:14) となるべき者たちを啓発するために、また生ける水の川があふれ出るべき人たちを潤すために、また尊い真理の鉱山となれるはずの者たちを豊かにするために、また天のメッセージをまだ聞いたことのない者たちに伝えているべき……者たちに福音の招きを繰り返すために、そして大通りや小道にいて「おいでください。もう準備ができましたから」(ルカ 14:17) という招きを与えているべき者たちを養うために費やされてきたのである。

罪の足かせが壊され、砕けた心をもって主を尋ね、彼らの義への切なる願いの答えを得た者たちは、決して冷たい無気力な者ではない。彼らの心は罪人に対する無私の愛によって満たされる。彼らは自分たちからすべての世俗の野心、すべての利己主義を捨て去る。神の深い事柄への接触は彼らを、さらに彼らの救い主に似た者とする。彼らはこのお方の勝利のうちに歓喜する。彼らはこのお方の喜びに満たされる。(教会への証 7 巻 23, 24)

8月8日

拡張的で手腕の試される働き

「ところが、あるユダヤ人たちはアンテオケやイコニオムから押しかけてきて、群衆を仲間に引き入れたうえ、パウロを石で打ち、死んでしまったと思って、彼を町の外に引きずり出した。しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいる間に、彼は起きあがって町にはいつて行った。そして翌日には、バルナバと一緒にデルベにむかって出かけた。その町で福音を伝えて、大ぜいの人を弟子とした後、ルステラ、イコニオム、アンテオケの町々に帰って行き、弟子たちを力づけ、信仰を持ちつづけるようにと奨励し、わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならぬ、と語った。」(使徒行伝 14:19-22)

「境を拡張しなさい」と主は言われる。福音の力は拡張的である。人々は熱心な魂を救う者たちであるべきであり、自分たちの働きを示す何かがあるべきである。もし働き人たちが実を産出しないならば、その木に何か欠点があるのかもしれない。ぶどう畑を管理する費用はできる限り少なくすべきである。なぜなら働きのなされるべき大きな領域があるからである。人々がいろいろの場所において雇われるとき、彼らの働きの結果が何であるかを調べるために彼らはつねに監督されるべきである。もし木が何の実も結ばないなら、それは移植される必要があるからかもしれない。もししかるべき働きの後なお何の実も結ばないなら、それを取り除きなさい。その働き人は魂の救済の働きにおいては無益な僕として解雇し、なにかの仕事につくように奨励しなさい。それによって彼は、首尾よく働くことのできる働き人たち一機転と知恵があり、神を畏れて魂をキリストに勝ち取る者たちを支えることによって自分の役割を果たすための資金を稼ぐことができる。……

神には、わたしたちの感化の輪を広げるために、また実際の宣教師—自分たちの同胞の魂の救済のために労する者—となる働き人たちの人数を増やすために、指定された方法がありなのである。……

パウロとバルナバはどのように働いたであろうか。彼らは入り口を見出すことができるすべての場所を尋ね、イエス・キリストへと魂を救うことに成功した。大きな領域のために働いた後、彼らは自分たちが建てた教会を訪ね、そしてその後、自分たちが祈りと議会とによって働きのために推薦されたアンテオケに戻った。

今も同様に、働きが運ばれるべきである。働き人になるために準備している者たちに使徒行伝 14 章を学ばせなさい。彼らがこの書全体についてよく理解するようにさせなさい。なぜならこの終わりの時において神との同労者となる者たちは、19 節に記録されている者たちと同じ経験を悟るからである。(重要な証(1903 年))

血は食すべきではない

「すなわち、聖霊とわたしたちとは、次の必要事項のほかは、どんな負担をも、あなたがたに負わせないことに決めた。それは、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、不品行とを、避けるということである。これらのものから遠ざかっておれば、それでよい。以上。」(使徒行伝 15:28, 29)

イスラエル民族がカナンに落ち着くと肉食が許されたが、その悪い結果を少なくするため、細心な制度が設けられた。豚をはじめ、その他汚れたものといわれていた動物、鳥、魚の肉を食べることは禁止された。また許可された肉であっても、その脂肪と血液を食べることはきびしく禁じられていた。

健康な動物だけが食用になるのであって、傷があるもの、ひとりでに死んだものの、血液を注意深く排泄していないものは、いずれも食用にはできなかった。

人間の食物として神が指定された計画から離反したため、イスラエル人は非常な損失をこうむった。肉食を望んだため、その結果を刈り取らねばなくなり、神の目的を果す域にたち至らなかった。「主は彼らにその求めるものを与えられたが、彼らのうちに病気を送って、やせ衰えさせられた」(詩篇 106:15)。彼らは霊的の事物よりもこの世的な事物を尊び、神が彼らのために立てられた目標である、きよい、高い標準に到達しなかった。(ミストリー・オブ・ヒーリング 287, 288)

肉食をするとき、わたしたちが食する汁と体液はわたしたちの血の循環に入る。そして、わたしたちは食べるものによって構成されているので、獣化されるようになる。動物は病気にかかっているため、その肉を食べることによって、わたしたちは病気の種をわたしたち自身の細胞組織と血液に植えつけることになり、こうして、熱っぽい状態が作り出されるのである。(スパルディング・アンド・メガン・コレクション 48)

動物を市場に売りに出すための過程は、動物に病気をもたらす。そしてできるだけ健康な状態にいても、運搬によって市場に到着する前に熱くなり、病気になってしまう。これらの病気にかかった動物たちの体液と肉は直接血に受け入れられ、人間の体の循環に入って、同じ体液と肉になるのである。そのように体液が組織の中に入れられるのである。そしてもしその人がすでに不純な血を持っているなら、それはこれらの動物の肉を食べることによって大いに悪化させられるのである。病気にかかる傾向は肉を食べることによって十倍も増加させられるのである。知的、道徳的、また肉体的力は肉の習慣的な使用によって低下させられるのである。肉を食べることは組織を狂わせ、知性を曇らせ、道徳的感受性を鈍くする。わたしたちは、あなた方兄弟姉妹に、最も安全な指針は肉には手をつけないことであると申し上げる。(教会への証 2 巻 64)

8月10日

今日のマケドニアの叫び

「ここで夜、パウロは一つの幻を見た。ひとりのマケドニア人が立って、『マケドニアに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい』と、彼に懇願するのであった。パウロがこの幻を見た時、これは彼らに福音を伝えるために、神がわたしたちをお招きになったのだと確信して、わたしたちは、ただちにマケドニアに渡って行くことにした。」(使徒行伝 16:9, 10)

必要なのは心から働く伝道者である。断続的な努力はほとんど善をなさない。われわれは注意を向けねばならない。われわれは心から熱心にならねばならない。

積極果敢な戦いによって、反対、危機、損失、人類の苦しみの最中にも、救霊事業は推進されなければならない。ある戦いにおいて、攻撃する連隊の一つが敵軍に打ち負かされていた時、前線の旗手はその軍隊が退却するのに自分の位置に踏みとどまっていた。隊長は軍旗を持ち帰るように叫んだが、旗手の返答はこうであった、「兵士たちを軍旗のもとに來させよ!」。兵士たちを軍旗のもとに行かせること、これこそ忠実な旗手一人一人にゆだねられた仕事である。主は心を尽くすよう求めておられる。クリスチャンだと公言する多くの人々は、自分自身と彼らとつながりのある人々をみ旗のもとに行かせる勇氣と力に欠けているという罪を犯していることをわれわれみんなは知っている。

すべての国々からマケドニアの叫びが聞こえている：「渡ってきて、わたしたちを助けて下さい。」神はわたしたちの前に領域を開かれ、もし人間の代理が神の代理と協力しさえすれば、多くの魂が真理に獲得されるのである。しかし公言する主の民は割り当てられた働きにおいて眠っており、多くの所は依然として比較的手つかずのままである。神はわたしたちの民を目覚めさせ何かをなさせるために、またそれを今なすようにとメッセージに次ぐメッセージを送られた。しかし、「わたしはだれをつかわそうか」という呼びかけに、少数の者たちしか「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」と応えてこなかった(イザヤ 6:8)。(教会への証 2 卷 64)

怠惰と無精の罪が教会からぬぐい去られるとき、主の御霊が恵みに満ちて表されるようになる。天の力が表されるようになる。教会は万軍の主の摂理的な働きをみるようになる。真理の光ははっきりした、強い光となって照りいで、使徒たちの時代のように、多くの魂が誤謬から真理に導かれるようになるのである。

天使たちは、人間の器一教会員一が、なすべき偉大な仕事に協力してくれるのを長い間待ってきた。彼らはあなたがたを待っているのである。(同上 9 卷 45, 46)

天幕造りをするとき

「[パウロは] ……アクラというポント生れのユダヤ人と、その妻プリスキラとに出会った。クラウドオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるようにと、命令したため、彼らは近ごろイタリアから出てきたのである。パウロは彼らのところに行ったが、互に同業であったので、その家に住み込んで、一緒に仕事をした。天幕造りがその職業であった。」(使徒行伝 18:2, 3)

パウロは、長期にわたったエペソ伝道において、その地域一帯に積極的な伝道活動を推し進めた三か年間、ふたたび、彼の職業に従事した。コリントにいたときと同様に、エペソにおいても、アクラとプリスキラがパウロと共にいて、彼の心を引き立てた。二人は、パウロの第二伝道旅行が終わって、アジアに帰ったときに、彼に従って行ったのであった。

パウロが手を使って働くことは、福音の伝道者にふさわしくないと行って、反対する人々があった。パウロのような、最高の地位を占める伝道者が、言葉の宣教に、手の仕事を結合させなければならないのだろうか。働き人は給料を受ける価値があるのではなかろうか。なぜパウロは、明らかによりよい事のために用いることができる時間を、天幕の製造に費やさねばならないのだろうか。

しかし、パウロは、このように費やした時間を損失であるとは考えなかった。彼は、アクラと働いていた時、大教師であられるおかたとの連絡を保ちつづけ、救い主のためにあかしを立て、援助が必要な人々を助ける、どんな機会をも見失わなかった。……パウロは、時には、昼も夜も働いた。それは、彼自身を支えるためだけでなく、同労者たちを助けるためでもあった。彼は、収入をルカと分かち合った。そして彼は、テモテを援助した。パウロは、他の人々の窮乏を助けるために、飢えをしのいだことさえあった。彼の生涯は、無私の生涯であった。

……

パウロは、肉体的労働を怠る者は、やがて衰弱することを知っていた。彼は、若い伝道者たちが、彼らの手を動かし、筋骨を活動させることにより、伝道地において彼らを待ち受けている苦勞と窮乏に耐える力が与えられることを、彼らに教えようと望んだ。……

自分たちは宣教のために召されたと感じる者をみな、その家族とともに、直ちに教会の継続的経済支持に依存するように奨励してはならない。経験の浅い者は、おだてられて増長し、分別を欠く奨励を受けて、自分たちでは何のまじめな努力もせず、全的に援助を受けることを期待する危険がある。神の働きを拡張するためにささげられた資金は、援助によって利己の野心を満足させ、安楽な生活を送り、ただ説教することだけを希望する人々のために消費すべきではない。(患難から栄光へ下巻 32-35)

8月12日

受けるよりも与える方がよい

「〔パウロは言った、〕今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。わたしは、人の金や銀や衣服をほしがったことはない。あなたがた自身が知っているとおりの、わたしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、働いてきたのだ。わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである。」(使徒行伝 20:32-35)

律法を守る者たちが買うことも売ることもできない時が来る。あなたの埋められたタラントを急いで掘り起こしなさい。もし神があなたにお金を委ねられたならば、信頼に忠実であることを示しなさい。あなたのナプキンを開いて、あなたのタラントを両替人に送り、キリストが来られるときご自分の物を利息と共に受けることができるようにしなさい。この働きが終結する前、最終的な窮地において、幾千もの人が喜んで祭壇の上に捧げられるであろう。男も女も神の大いなる日に立つために魂を準備させる働きを共にすることを祝福された特権だと感じ、そして今日数ドルを捧げるのと同じようにためらいもなく何百ドルを捧げるのである。もしキリストの愛がご自分の公言する民の心に燃えているならば、わたしたちは今日同じ精神が表されるのをみるのである。彼らが魂の救済のためのすべての働きの終結がどんなに近いかを悟りさえしたら、彼らは初期の教会のメンバーたちがしたように惜しげなく彼らの所有物を犠牲にするであろう。彼らは神のみ事業の発展のために、世の人々が富を得るために働くように熱心に働くであろう。機転と能力を働かせ、ため込むためではなく主の宝庫に注ぎ込むために財産を獲得しようと熱心で無私の働きがなされる。

ある者たちが財産を働きに投資することによって貧しくなるとしたらどうなるだろう。キリストはあなたのために貧しくなられた。しかしあなたは自分のために永遠の富、無くなることのない宝を天に確保しているのである。あなたの財産は銀行に預けるより、または家や土地に投資するよりもそこにあるほうがはるかに安全である。それは古びることのない袋に蓄えられているのである。泥棒は一人としてそれに近づくことができず、炎もそれを焼き尽くすことができない。

ある者たちは生涯の間、利己的に彼らの財産を持ち続け、遺産においてみ事業を覚えることによって彼らの怠慢の償いをするを信じているが、そのように遺産によって贈られた財産の半分も指定された目的に充てられないのである。……あなたの管理職を他の者に残してはならない。……この厳粛な真理を信じる者たちは、金の崇拜という世俗の野心を非難するような自己犠牲の精神を保持するべきである。(ヒストリカル・スケッチ・オブ・SDA・ミッション 292)

8月13日

パウロの奉仕の要約

「[パウロが要約して言った:] ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、そして、一昼夜、海の上を漂ったこともある。幾たびも旅をし、川の難、盗賊の難、同国民の難、異邦人の難、都会の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢えかわき、しばしば食物がなく、寒さに凍え、裸でいたこともあった。なおいろいろの事があった外に、日々わたしに迫って来る諸教会の心配ごとがある。」(コリント第二 11:24-28)

魂の救済の働きに携わっている者たちは、キリストの共労者なのである。このお方の働きは私欲のない慈善の働きであり、絶え間ない自己犠牲の働きであった。このお方の天来の恵みにあずかる者となるようにと、それほど大いなる犠牲を払われた者たちが、今度は自分が他の者たちを真理の知識に至らせる大いなる働きを助けるために自己を犠牲にし、自己を否定するべきである。利己主義は捨てるべきである。利己的願望また利己的楽しみが、今魂の救済における神の働きの道にはだかるべきではない。神の牧師たちはキリストの代わりに働いている。彼らはこのお方の大使である。彼らは自分たちの安らぎ、快楽、楽しみ、望み、また都合を調べるべきではない。彼らはキリストのために苦しみ、このお方と十字架に付けられ、すべての言葉の意味においてキリストの苦しみを共にするということを知ることができることを喜ばなければならない。(教会への証 1 巻 431, 432)

神のみ事業は熱心な者たち、熱意、望み、また勇氣に溢れた者たちを大いに必要としている。……わたしたちには経験において弱々しく、クリスチャンの恵みにおいて不十分で、献身において欠けており、容易に落胆し、自分の意志を満足させるのに熱心で自分の利己的目的を達成するための努力において辛抱強い牧師たちが多くいる。そのような者たちはこの時代の必要を満たさないのである。わたしたちはこの終わりの時において、つねに目を覚ましている者たちを必要としている。真理への愛において正直で神のみ事業を発展させ尊い魂を救うことができれば、犠牲を払っても喜んで働く緊急召集兵を必要としている。イエスが彼らに残された遺産の一部だと知りながら、苦難や試みにおいてつぶやき不平を言わない者たちを必要としている。彼らは宿営の外に喜んで出て行き、キリストの良い兵卒として責めをしのび、重荷を負うべきである。彼らはキリストの十字架をつぶやかず、不平を言わずいらだたず負い、苦難において辛抱強いのである。(教会への証 3 巻 423)

8月14日

投獄前のつかのまの休息

「〔パウロの一行は〕カイザリヤに着き、かの七人のひとりである伝道者ピリポの家に行き、そこに泊まった。」(使徒行伝 21:8)

〔カイザリヤで〕パウロは滞在した。……これらの平和で幸福な日々は、彼が長い間喜ぶための完全な自由の最後の日々であった。エルサレムで彼を待ち受けていた激しい場面に入る前に、主は恵み深くも休みと幸福な交わりの時期によって彼の霊を新たにさせられた。

福音伝道師であるピリポは最も深い同情の絆でパウロに結ばれていた。はっきりした識別力と信頼できる高潔の人であるピリポは、ユダヤ人の束縛から離脱した初めの者であり、そうすることによって使徒の働きのために道を準備する助けをしたのである。サマリヤ人に福音を宣べ伝えたのはピリポであった。エチオピア人の高官にバプテスマを授ける勇気を持っていたのもピリポであった。しばらくの間これらの二人の働き人の歴史は密接に絡み合っていた。エルサレムの教会を離散させ、七人の執事の組織の実効性に壊滅的な打撃を与えたのはパリサイ人であるパウロの猛烈な迫害であった。エルサレムからの逃亡はピリポにその働き方を変えさせ、パウロが生涯を捧げたのと同じ召しを追い求めるという結果にいたった。パウロとピリポが互いの交りに過ごした時間は尊いものであった。ステパノが殉教を苦しみながら天に向けた彼の顔に輝いた光が、迫害者であるサウロの上にその栄光のうちに輝き、彼をイエスの足元に無力な嘆願者として連れていったときの日々を思い起こした思い出は感動させるものであった。

カイザリヤでの使徒の到着のあとすぐ、預言者アガボがユダヤから下ってきた。彼は聖霊によってパウロを待ち受けている運命について警告されてきており、古代の預言者の象徴的な方法によって彼は使徒の帯を解き、それで自分の手足を縛り、「この帯の持ち主を、ユダヤ人たちがエルサレムでこのように縛って、異邦人の手に渡すであろう」と言った(使徒行伝 2:11)。パウロの連れの者たちはエルサレムへの訪問は大いなる危難が伴うことに気がついていて、しかし彼らは危険の範囲全体を予見していなかった。今や、心配は確かなものになり、ユダヤ人から遭遇する危難にはローマの投獄の恐ろしさが加えられていた。彼らは熱心にパウロに彼がいるところに留まるように、また彼らに異邦人の教会からの寄付を届けるためにエルサレムに行くことを許すように熱心に懇願した。(パウロの生涯からのスケッチ 203-205)

神の声に従う

「その時パウロは答えた、あなたがたは、泣いたり、わたしの心をくじいたりして、いったい、どうしようとするのか。わたしは、主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことをも覚悟しているのだ。こうして、パウロが勧告を聞きいれてくれないので、わたしたちは、主のみこころが行われますように、と言っただけで、それ以上、何も言わなかった。」(使徒行伝 21:13, 14)

使徒は彼の愛する兄弟の懇願によって深く動かされた。人間の判断にしてみれば彼は自分の計画を賢明ではないとして断念する十分な理由があった。しかし彼は神の御心への従順のうちに動いていると感じていたので、友の声、また預言者の警告によってさえも彼を思いとどまらせることはできなかった。彼は義務の道から右にも左にもそれないのであった。彼はもし必要であれば、獄にもまた死にいたるまでもキリストに従わなければならない。彼の涙は自分のためには流されなかったが、自分の兄弟の同情のうちに、彼の決断がそれほどの大いなる悲しみをもたらした者たちの上に流された。……

パウロと彼の同伴の者たちは来るべき悪の予感によって心を深く暗い気分にさせられて、エルサレムへと出発した。……今のように悲しい心でエルサレムの道を歩いたことはこれまでなかった。彼はわずかな友人と多くの敵を見出すことを知っていた。彼の周りの群集のなかには、彼の名前が出ることによって狂気へと興奮させられる何千もの人々がいた。彼は預言者の殺人者であり、神の御子を拒み殺し、そして今や神の怒りの脅かしが臨もうとしている都市にいたのであった。彼は、自分自身が、いかにキリストの弟子たちに対して苦々しい偏見を抱いていたかを思い起こして、惑わしに陥っている同胞に、深いあわれみの情を感じた。しかし、彼らを助けることのできる望みは、何と薄いことであろうか。かつて、彼自身の心の中に燃えていたのと同じ盲目的怒りが、今、彼に対して、恐ろしい勢いで、全国民の心の中で燃えているのであった。

またパウロは、同信の兄弟たちの同情と支援にさえ頼ることができなかった。悔い改めないユダヤ人たちは、しつこく彼につきまとって、時を移さず、直接また手紙の両方によって、彼と彼の働きに関する不利な報告を広めた。そして、ある者は使徒たちや長老たちでさえ、この報告が真実であると信じて、何の反駁もしなければ、彼と一致しようとするどんな希望も示さなかった。しかし、パウロは、失望すべき状況の最中にありながらも、絶望しなかった。彼は、彼自身の心に語った天からの声が、なお、同胞の心に語りかけることを信じ、同信の弟子たちが愛し仕えている主が、彼らの心と彼の心を一致させ、福音の働きに従事させて下さることを信じたのである。(パウロの生涯からのスケッチ 205-207)

8月16日

危険な譲歩

「〔エルサレムの兄弟たちはパウロに提案して言った、〕わたしたちの中に、誓願を立てている者が四人いる。この人たちを連れて行って、彼らと共にきよめを行い、また彼らの頭をそる費用を引き受けてやりなさい。そうすれば、あなたについて、うわさされていることは、根も葉もないことで、あなたは律法を守って、正しい生活をしていることが、みんなにわかるであろう。」（使徒行伝 21:23, 24）

神の霊は〔ヤコブと教会の長老たちの〕この提案を促したのではなかった。それは臆病の実であった。……弟子達自身もまだ礼典律への尊重を抱いており、そうすることにより自分たちの同胞の信頼を得、彼らの偏見を除き、彼らを世の贖い主としてのキリストに信仰をおくように彼らを勝ち取ることを望んで、譲歩するのに意欲的すぎたのである。エルサレムを訪問することにおいてのパウロの大いなる目的は、パレスチナの教会と和することであった。彼らが彼に対して偏見を抱き続ける限り、彼らはつねに彼の影響力を弱める働きをしているのであった。彼はもし彼が自分の役割において何らかの合法的譲歩によって、彼らを真理へと勝ち取ることができるならば、他の場所において福音の成功への大いなる妨げを除くことができると感じた。しかし彼は彼らが求めたようにそれほどまで譲歩するように、神から許可されていなかった。この譲歩は彼の教え、また彼の品性の堅固な高潔とも一致していなかった。……

兄弟たちと調和したいというパウロの大きな願い、信仰の弱い者に対する彼の思いやり、キリストと共にいた使徒たち、特に主の兄弟ヤコブに対する彼の尊敬、また、できるだけ原則を曲げずにすべての人に対しては、すべての人のようになるという彼の決心などをみな考慮するときに、彼が、これまで歩んできた堅固で明確な道からやむを得ずそれたとしても、大して驚くに当たらない。しかし、彼の和解の努力は、望んだ目的を達成するのではなくて、ただ危機の到来を促進し、教会は、最も堅固な柱を失い、全地のクリスチャンを悲しませる結果になったのである。……

裕福な者が貧しい兄弟たちの必要な費用を負担し、そうすることによって彼らの誓願を果たす助けをすることは、ユダヤ人によって敬虔な行為と見なされていた。これを、パウロは四人のクリスチャンのナジル人のためにすることを同意した。使徒自身は貧しく、自分の日々の糧のために自分の手によって働いていたが、彼は快くこの費用を負い、ナジル人に同伴した。……この譲歩の行動を取るようにパウロに勧告した人々は、彼がどのように大きな危機にさらされるかを十分に自覚していなかった。（パウロの生涯からのスケッチ 212-215）

議会を前にしてのパウロ

「七日の期間が終ろうとしていた時、アジヤからきたユダヤ人たちが、宮の内でパウロを見かけて、群衆全体を煽動しはじめ、パウロに手をかけて叫び立て、「イスラエルの人々よ、加勢にきてくれ。この人は、いたるところで民と律法とこの場所にそむくことを、みんなに教えている。その上、ギリシヤ人を宮の内に連れ込んで、この神聖な場所を汚したのだ」。彼らは、前にエベソ人トロピモが、パウロと一緒に町を歩いていたのを見かけて、その人をパウロが宮の内に連れ込んだのだと思ったのである。そこで、市全体が騒ぎ出し、民衆が駆け集まってきて、パウロを捕え、宮の外に引きずり出した。そして、すぐそのあとに宮の門が閉ざされた。彼らがパウロを殺そうとしていた時に、エルサレム全体が混乱状態に陥っているとの情報が、守備隊の千卒長にとどいた。」(使徒行伝 21:27-31)

使徒は今、自分が一員であった議会―ステパノが罪に定められた議会の前に立っていた。その場面の記憶、キリストの僕の罪の宣告を確かなものにするための自分の努力の記憶が生き生きと彼の思いの前によみがえった。自分の裁判官となる者たちを見たとき、彼はガマリエルの学校で仲間であった者たち、またイエスの弟子たちを迫害することにおいて彼と結合した者たちを認めた。彼らはステパノを滅ぼそうと必死であったのと同様に、パウロを殺そうと必死になっていた。

使徒の態度は平静で確固としていた。彼の心のうちで支配していたキリストの平安が、彼の顔に表されていた。しかし潔白を意識していた目つきは、彼の告発者たちを怒らせたので、彼が恐れもなく彼らに「兄弟たちよ、わたしは今日まで、神の前に、ひたすら明らかな良心にしたがって行動してきた」と言ったとき(使徒行伝 23:1)、彼らの憎しみは新たに燃え起こされ、大祭司は彼の口を打つように命じた。この冷酷な命令に、パウロは「白く塗られた壁よ、神があなたを打つであろう。あなたは、律法にしたがって、わたしをさばくために座についているのに、律法にそむいて、わたしを打つことを命じるのか」と宣言した(使徒行伝 23:3)。これらの言葉は激情のほとばしりではなかった。聖霊の感化の下で、パウロはキリストがユダヤ人の偽善を非難するときに口にされたものに似た、預言的な非難を口にしたのであった。使徒によって宣言された裁きは、不法で偽善的な大祭司がユダヤ人の戦いにおいての暗殺者たちによって殺されたときに、恐ろしくも成就したのであった。しかし傍観者たちはパウロの言葉を不敬とみなし、恐怖に襲われて「神の大祭司に対して無礼なことを言うのか」と宣言した。パウロはいつもの礼儀を持って、「兄弟たちよ、彼が大祭司だとは知らなかった。聖書に『民のかしらを悪く言うてはいけない』と、書いてあるのだった」と答えた(使徒行伝 23:5)。(パウロの生涯からのスケッチ 221, 222)

8月18日

牢屋における慰め主

「こうして、争論が激しくなったので、千卒長は、パウロが彼らに引き裂かれるのを気づかって、兵卒どもに、降りて行ってパウロを彼らの中から力づくで引き出し、兵営に連れて来るように、命じた。その夜、主がパウロに臨んで言われた、しっかりせよ。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなくてはならない。」(使徒行伝 23:10, 11)

夕べにはパウロはまだローマの兵営におり、無作法な軍隊が唯一の仲間であり、彼らの残忍な冗談と不快な冒瀆が耳に入ってくる唯一の音であった。彼は今や自分の敵の存在によって奮い立たせられることもなく、彼の友の同情によっても支えられなかった。将来は暗黒に包まれているように思われた。彼は自分の行動は、神に喜ばれるものではなかったのではないかと恐れ始めた。結局、エルサレムの訪問は、間違いだったのであろうか。彼が、兄弟たちと団結することを熱望したことが、このような不幸な結果を招いたのであろうか。……

彼の神のみ事業が、非難され、彼の国家の宗教が悪評されているのであった。今や、彼は、捕らわれの身となった。そして彼は、敵たちが、悪意の限りをつくして、彼を殺そうとしているのを知っていた。教会のための彼の働きはもうこれで終わり、今、狂暴なおおかみがいり込んできて、群れを滅ぼすのであろうか。パウロにとって、キリストのみわざは、重大な関心事であった。そして彼は、各地の教会の当面する危機について憂慮した。彼らは、パウロがサンヒドロンの議会において当面したのと同じような人々の迫害に会わなければならなかった。彼は、苦悶と失望のあまり、泣いて祈った。主はご自分のしもべをお忘れにならなかった。主は神殿の庭で、彼を暴徒の手から守られた。主は、サンヒドロンの議会において、彼と共におられた。主は、兵営において、彼と共におられた。そして、主は、喜んでご自身を忠実なしもべにあらわされた。かつての何回かあった試みのときと同様に、パウロは今回も夜の幻によって慰められ励まされた。彼が都市を離れてもっと安全で順調な地へ行くことを考えているとき、こうした訪れがあったのであった。そして今主は彼の傍に立って言われた、「しっかりせよ。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなくてはならない」(使徒行伝 23:11)。パウロは、長い間、ローマを訪問したいと思っていた。彼はローマにおいて、キリストのためにあかしを立てたいと熱望していたが、彼の計画は、ユダヤ人の敵意によって挫折してしまったと感じていた。今ですら彼は、自分が囚人として行くようになるとは、夢想だにしていなかった。(パウロの生涯からのスケッチ 223-225)

神がパウロのために介入される

「夜が明けると、ユダヤ人らは申し合わせをして、パウロを殺すまでは飲食をいっさい断つと、誓い合った。この陰謀に加わった者は、四十人あまりであった。」(使徒行伝 23:12, 13)

ここに主がイザヤを通してずっと以前に非難された断食がある。「ただ争いと、いさかいのため、また悪のこぶしをもって人を打つため」の断食である(イザヤ 58:4)。ユダヤ人たちはこのようにして彼らの非道の計画に、宗教の支持を与えようとした。彼らの恐ろしい誓いによって自分たちを強化して、彼らは祭司長とサンヒドリンの議員たちのところに来て、彼らの目的を知らせた。パウロの訴訟をさらに調査するためかのように、裁判所の前にもう一度パウロが連れ出されるように要求し、暗殺者たちが要塞からの途中で彼を待ち伏せし殺すことが提案された。そのような恐ろしい犯罪が、宗教の熱心さのうわべのもとに隠されていた。悪魔的な企てを非難する代わりに、祭司と指導者たちは熱心にそれに同意した。パウロがアナニヤを白く塗られた墓に比べたとき、彼は真実を語ったのである。

神が摂理によってご自分の僕の命を救うために介入されなかったら、あくる日企ては実行に移されていたであろう。ペテロが囚人となり死の判決が下されていたとき、兄弟たちは彼の救いのために神に熱心な祈りを日夜捧げた。しかしモーセからの背教者、危険な教理の教師とみなされていた彼のためには、そのような関心は示されなかった。パウロが暴力的死から免れたのは、勧告が彼を危険な立場に追いやった長老たちではなく、親戚の注意深い同情のおかげであった。

使徒に強く結ばれていた彼の甥が、殺人の陰謀を聞き、一刻の猶予なくその事柄を彼の叔父に報告した。パウロは直ちに百卒長の一人を呼んで、この若者を司令官のもとに連れて行くように求め、彼が司令官に与える重要な情報を持っていると言った。若者はそれに応じてクラウデオ・ルシヤの前に連れてこられ、彼は若者を親切に受け入れた。……〔若者に応じて司令官は直ちに〕「百卒長ふたりを呼んで言った、歩兵二百名、騎兵七十名、槍兵二百名を、カイザリヤに向け出発できるように、今夜九時までに用意せよ。また、パウロを乗せるために馬を用意して、彼を総督ペリクスのもとへ無事に連れていけ。」(使徒行伝 23:23, 24)。ルシヤはパウロを自分の管轄から移すために喜んでこの機会を利用した。(パウロの生涯からのスケッチ 225-227)

8月20日

しばらくの間の避難所

「ここでペリクスは、〔ユダヤ人対パウロの初めの裁判の、〕この道のことを相当わきまえていたので、千卒長ルシヤが下って来るのを待って、おまえたちの事件を判決することにする、と言って、裁判を延期した。そして百卒長に、パウロを監禁するように、しかし彼を寛大に取り扱い、友人らが世話をするのを止めないようにと、命じた。」(使徒行伝 24:22, 23)

神の僕が、主の民と公言する人々の憎しみを逃れて、異邦人の間に避難所を見いだしたことは、パウロの場合が最初ではなかった。……世と快楽を愛するものにとって、神がご自分の民の誤りを正すために送られる警告と非難のメッセージを正しく評価することは不可能である。彼らは忠実な僕の真剣さと熱心さと、不忠実な者の不真面目でうわべだけの精神の区別をつけることができない。一人は剣がやってくると宣言するが、他の者は悪の日を遠くに延ばす。一人は忠実に罪を非難するが、他のものはそれを許し和らげる。神の民と公言する者たちが、このお方から離れ信仰の単純さから離れるとき、このお方の使命者の言葉は彼らにとって不必要にも過酷で厳しく思われる。彼らは偏見と不信を抱き、ついには自分自身をサタンの側に完全に置くのである。彼の提案は好ましくまた心地よく思われる。彼らは精神と意見において大欺瞞者に支配され、彼に自分たちの考えを導くことを許すことによって、彼らはまもなく彼に自分たちの行動を導くことを許すのである。

キリストは、背信したイスラエルには、神の忠実な使命者のために安全な所がないのであると宣言されたとき、ナザレのユダヤ人に恐るべき真実を語られたのである。彼らは、神の使命者の価値を知ろうともせず彼の働きを感謝しようともしなかった。……

ナザレ人に対する救い主の譴責の言葉は、パウロの場合、ただ不信のユダヤ人だけでなく、同信の兄弟たちにも当てはまった。もし教会の指導者たちが、パウロに対する苦い感情をことごとく捨て去って、異邦人に福音を伝えるために神の特別の召しを受けた者として彼を受け入れていたならば、主は、魂の救済のためにまだ働くようにとパウロを彼らに残しておかれたことであろう。初めから終わりを御覧になるお方、すべての者の心を理解されるお方は、パウロに対して抱かれていた嫉妬と妬みの結果がどうなるかを御覧になった。神は、パウロの働きがこのように速やかに終わるようには定めておられなかった。しかし神は、彼らがひき起こした一連の事件を挫折させるために奇跡を行われはしなかった。(パウロの生涯からのスケッチ 229-231)

パウロが証言の機会をつかむ

「ペリクスは、ユダヤ人である妻ドルシラと一緒にきて、パウロを呼び出し、キリスト・イエスに対する信仰のことを、彼から聞いた。そこで、パウロが、正義、節制、未来の審判などについて論じていると、ペリクスは不安を感じてきて、言った、きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする。」（使徒行伝 24:24, 25）

パウロは、主の囚人として別の方法では近づくことのできなかった魂に、福音の真理を提示する機会があった。残酷で放縱なローマの総督と放蕩なユダヤ人の皇女が彼の唯一の聴衆であった。今彼らは今まで聞いたことのなかった、また二度と聞くことがないかも知れず、もし拒否されれば神の日において速やかな証拠となる真理を聞こうと待っていた。

パウロは、これを神がお与えになった機会だと思い、忠実にそれを活用した。彼は、自分を殺すことも、自由にすることもできる男女の前に立っていることを知っていた。それでも彼は、彼らに賞賛やへつらいの言葉を言わなかった。……

パウロは、福音が、彼の言葉に耳を傾けるすべての者に対して、要求する権利を持っていることを自覚した。……彼は、天の審判廷において、彼の聴衆のひとりひとりに会い、ただ彼のすべての言行だけでなく、彼の言葉と行為の動機と精神に対しても、言い開きをしなければならないことを知っていた。

ペリクスの行動は、非常に凶暴で残酷であったので、彼の品性と行為に欠陥があることをあえてほのめかした者は、これまでほとんどなかった。しかし、パウロはそのような恐れがなかった。彼は、聴衆の立場への完全な敬意をもって、率直に、キリストに対する彼の信仰とその信仰の理由を表明し、特に、クリスチャン品性に不可欠な徳について語ったのであったが、彼の前にいる高慢な夫婦は、はなはだしくこうした徳に欠けていたのである。

彼は、聴衆の前に、神の品性—神の義、正義、公正—と、神の律法の性質と義務を提示した。彼は、まじめに生活して、節制し、情欲を理性の支配の下におき、神の律法に従い、肉体的、知的能力を健康な状態に保つことが、人間の本分であることを明確に示した。審判の日は必ず来る。……富も地位も、あるいは称号も、人に神の恵みを得させるように高め、または、罪の奴隷から贖う力がないのである。……それからパウロは聴衆の思いを、罪のための一つの大きい犠牲に導こうと試みた。……

ペリクスは震えたが、悔い改めなかった。（パウロの生涯からのスケッチ 239-244）

8月22日

軽視されてはならない機会

「〔ペリクスは〕……パウロから金をもらいたい下どころがあったので、たびたびパウロを呼び出しては語り合った。さて、二か年たった時、ボルキオ・フェストが、ペリクスと交代して任についた。ペリクスは、ユダヤ人の歓心を買おうと思って、パウロを監禁したままにしておいた。」(使徒行伝 24:26, 27)

その後、二年の間、パウロに対して何の処置も取られなかったが、しかし彼は、監禁されたままであった。ペリクスは、幾度か彼を訪れ、彼の話に熱心に耳を傾けた。しかし、彼の一見友好的な態度の真の動機は、利益を得たいからであった。そして彼は、多額の金を支払えば釈放されることができると、ほめかすのであった。しかし、パウロは、高貴な品性の持ち主であったので、いろいろを使って自由を得ることは、とうていできなかった。彼は、何の罪も犯していなかったのであるから、自由を得るためにあえて悪を犯そうと思わなかった。さらに、彼は、身代金を支払いたいと考えたとしても、貧しくて彼自身はとても払えなかった。そして、自分のために、信者たちの同情と寛大さに訴えたくはなかった。また彼は、自分が神の手の中にあるという自覚を持っていた。だから、自分に対する神のみこころに介入したくなかったのである。……

ペリクスは、ついに、ユダヤ人に対する重大な罪惡のゆえにローマに召還された。ペリクスは、召還に応じてカイザリヤを去る前に、「ユダヤ人の歓心を買おうと思って、パウロを監禁したままにしておいた。しかし、ユダヤ人の信任をもう一度得ようとするペリクスの試みは、うまく行かなかった。彼は、恥をこうむって免職された。……

パウロが、正義、節制、未来の審判などについて論じた時に、天からの光がペリクスの心に輝いた。それは、彼が自分の罪を認めて、それを捨て去るために、天から与えられた機会であった。しかし、彼は、神の使者にむかって、「きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする」、と言った。彼は、あわれみの最後の機会を軽視した。その後、彼は、二度と神からの召しを受けなかったのである。(患難から栄光へ下巻 114, 115)

あなたにはすがりつくことのできる強力な力がある。それはあなたにとって、悩みや苦しみや危険な日に要塞また城となる。しかし神の霊にペリクスが言ったように「きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする」という者に、さらに良い時またさらに都合の良い機会がやってくるであろうか。わたしたちが現在よりも、もっと容易に罪を離れることができる機会がやってくるだろうか。今よりももっと容易に真理をつかむことができる時は来るだろうか。(レ・アト・ヘラルド 1870 年 4 月 12 日)

フェストの識別

「さて、フェストは、任地に着いてから三日の後、カイザリヤからエルサレムに上ったところ、祭司長たちやユダヤ人の重立った者たちが、パウロを訴え出て、彼をエルサレムに呼び出すよう取り計らっていただきたいと、しきりに願った。彼らは途中で待ち伏せして、彼を殺す考えであった。」(使徒行伝 25:1-3)

〔フェスト〕は訴訟を聞くために裁判の席についた。ユダヤ人たちはこの時は弁護人なしで、自分たちで告訴することを選んだ。裁判は告発人の側の熱烈で、無分別な叫びの光景であったが、パウロは完全な冷静と率直さを持つてはつきりと彼らの供述の欺瞞を示した。

ユダヤ人たちは異端と反逆と冒涇の告訴を繰り返したが、それらを支持する証人を連れてくることができなかった。彼らはかつてカイザルの誉れのための偽りの熱心さによってピラトを脅かしたように、フェストを脅かそうと試みた。しかしフェストはローマの法律について十分な理解をもっていたので、彼らの叫びによって惑わされなかった。彼は議論している本当の問題が全くユダヤ人の教理に関するものであって、パウロには何一つ告訴に該当するものはなく、パウロの死刑の宣告、投獄の宣告にさえ当たらないことを正しく理解した。しかし、もしパウロが罪に定められず、あるいは、彼らの手に渡されないとするならば、どんなに彼らが怒り狂うかが、フェストには良くわかった。

彼は自分の前の光景を、嫌悪感をもって眺めた。ユダヤの祭司と指導者たちが、苦い顔と光った目を持って、自分たちの任務の尊厳を忘れて、彼らの激情の叫びで裁判場が鳴り響くまで大きくなった調子で、しきりに彼らの告訴を繰り返した。これらすべてを終わらすことを切実に願って彼は敵の前において冷静で沈着なパウロに向かって、彼がフェストの保護のもとにエルサレムへ行行って、サンヒドリンによって裁かれたいかどうかと尋ねた。

これは事実上問題をローマからユダヤの管轄に移すのであった。パウロは犯罪のゆえに神の怒りを招いている人々から、正しい裁判を期待することができないのを知っていた。預言者エリヤのように、彼は天の光を拒否し、真理に対して心をかたくなにした人々より異邦人の間の方が安全なのであった。彼の命が彼の敵の怒りによって危うくされたとき、彼を救う者であったのは異邦人の長官であった。ガリオ、ルシヤ、そしてペリクスでさえ、ユダヤの裁判所が彼の有罪を証明することなく罪に定めたとき、彼の無実をためらいもなく宣言したのである。(パウロの生涯からのスケッチ 248, 249)

8月24日

パウロの経験は繰り返される

「パウロは言った、……もしわたしが悪いことをし、死に当るようなことをしているのなら、死を免れようとはしません。しかし、もし彼らの訴えることに、なんの根拠もないとすれば、だれもわたしを彼らに引き渡す権利はありません。わたしはカイザルに上訴します。そこでフェストは、陪席の者たちと協議したうえ答えた、おまえはカイザルに上訴を申し出た。カイザルのところに行くがよい。」(使徒行伝 25:10-12)

パウロは争いに疲れ、何度も何度も反論されてはたびたびやり直される告訴の激しい繰り返しにうみ疲れた。彼の活動的な精神は、度重なる遅延と、うんざりするようなどっちつかずの裁判と投獄とに耐えられなくなった。粗野で、怠惰で無節操な軍隊、頻繁な論争の響き、ユダヤ人と異邦人の間の争いと流血の噂との日々の接触は彼にとってどんなに嫌悪感を催させたことであろう。彼はユダヤ人の祭司や指導者から望むことはもう何もなかった。しかしローマの市民として彼には特別な特権があり、カイザルに上訴することができたので、せめてしばらくの間は、彼の敵を食い止められるのであった。……

もう一度ユダヤ人のいだいていた偏見と自己義から生じた憎しみが、神の僕たちを異邦人の保護へと向けさせたのであった。……現代の神の民は今なお同じ精神に当面しなければならない。やがて彼らが通過しなければならない大なる危機において、彼らはパウロの経験をさらに良く知ることになるのである。キリストの弟子であると自称する多くの人々の中には、ユダヤ国民のなかに存在していたのと同じ誇りや形式主義、虚栄、利己心、圧迫が存在している。戦いが終わり、勝利が勝ち取られる前に、わたしたちは民としてパウロが経験したものと同様な試練を経験するのである。わたしたちは同様の心のかたくなさ、同様の残酷な決意、同様の頑固な憎しみに出会わなければならない。

キリストの代表者であると主張する人々が、パウロをあしらった祭司や指導者たちと同様の行為を取るであろう。良心の命じるところに従って恐れることなく神に仕えようとするものはすべて、立つために道徳的勇氣、堅固さ、神と神の言葉の知識を持っていなければならない。……

神はご自分の民が間もなくやってくる危機に対して準備することを望んでおられる。準備ができていようがいまいが、わたしたちはみなそれに当面しなければならない。そして、神の標準に合うように品性を徹底的に訓練した者たちだけが、試練の時に堅く立つことができるのである。しかし、敵があたり一面にいて彼らに悪をもたらそうと見張っているときに、天の神はご自分の尊い宝石に幸いをもたらそうと見張っておられるのである。(パウロの生涯からのスケッチ 249-252)

著しい対照

「数日たった後、アグリッパ王とベルニケとが、フェストに敬意を表するため、カイザリヤにきた。ふたりは、そこに何日間も滞在していたので、フェストは、パウロのことを王に話し……た……そこで、アグリッパがフェストに、わたしも、その人の言い分を聞いて見たい、と言ったので、フェストは、では、あす彼から聞きとるようにしてあげよう、と答えた。翌日、アグリッパとベルニケとは、大いに威儀をととのえて、千卒長たちや市の重立った人たちと共に、引見所にはいつてきた。すると、フェストの命によって、パウロがそこに引き出された。」(使徒行伝 25:13, 14, 22, 23)

パウロは今、新たな裁判の前に自分自身を弁護するのではなく、ただ個人的な聴衆の好奇心を満足させなければならないのであった。長官の著名な客のため、またカイザリヤの富と貴族を代表している招かれた一団のために一時間の楽しみを提供するためであった。軍の長官また、町の指導的市民が出席するのであって、フェストはこの機会を来客たちに敬意を表して、最も印象的な見せびらかしをする機会にしようとした。

アグリッパとベルニケは貴族の見せびらかしと壮麗さのうちに、東洋の飾りつけの高価な衣服を身に着けた従者たちの列に伴われて謁見室に入った。誇らしげに傲慢な支配者は美しい姉妹と共に集会の間を通り、長官の傍に座った。彼の命令によって、パウロがまだ囚人として手錠をかけられたまま入り、王は無情な好奇心で、病氣と長い投獄また断続的心配のために今や体もゆがみ青白くなった彼を眺めた。

なんと著しい対照が表されたことだろう。アグリッパとベルニケは神が尊ばれる品性の特性に欠けていた。彼らは神の律法の違反者であり、心も生活においても墮落していた。神と天使たちは彼らの罪の方針を嫌悪された。しかし彼らには、ある程度限られた権威と地位があったので、世には気に入られていた。警備の兵士につながれた年老いた囚人は、衣服また姿において、世が尊敬を払うような人目を引く魅力的なものを何も示してなかった。しかし、友も富も地位もないように見えるこの男には、世人が見ることのできない護衛がいた。天のみ使いが彼の付添い人であった。もしこの光り輝く使者たちの中の一人の栄光が輝きわたったら、王者の華やかさも誇りも色あせたであろう。王も廷臣たちもキリストの墓にいたローマの番兵たちのように、地に打ちのめされたであろう。全天は、今神の御子への信仰のゆえに囚人として留置されていたこの一人の男に関心をよせていた。(パウロの生涯からのスケッチ 253, 254)

8月26日

力強い証

「アグリッパはパウロに、おまえ自身のことを話してもよい、と言った。そこでパウロは、手をさし伸べて、弁明を始めた。アグリッパ王よ、ユダヤ人たちから訴えられているすべての事に関して、きょう、あなたの前で弁明することになったのは、わたしのしあわせに思うところであります。」(使徒行伝 26:1, 2)

「居並ぶ人々はみな、パウロのすばらしい体験談に魅せられて聞き入っていた。」
(患難から栄光へ下巻 125)

しばらくの間〔アグリッパは〕自分の地位の権威を忘れ、自分の周囲を見失って、ただ聞いた真理だけを意識し、ただ神の使者として自分の前に立っている謙虚な囚人を見て心ならずも、「おまえは少し説いただけで、わたしをクリスチャンにしようとしている」と答えた(使徒行伝 26:28)。……

彼の言葉を聞いた者たちは、パウロがただの囚人ではないと確信した。彼が語ったように語り、また彼が提示したように議論を提示することができる者、また靈感を受けた信仰に満ちあふれてこれほどまでに高められ、これほどまでにキリストの恵みによって豊かにされ、また神と人との平安を自覚しこれほどまでに平静な者、またこれらすべての名高い王侯の人々が、彼を支えたのと同じ望みと確信と信仰を持つようになると願うことができた者、その一方で少しも復讐を願うことなく、自分の経験した争闘や悲しみや苦悩を彼らが免れることができるようにと祈ることができた者—そのような人が詐欺師であるはずがない。

公平に評すればフェストやアグリッパやベルニケが使徒を束縛している鎖をつけているべき犯罪者であった。全ての者は重罪を犯していた。これらの犯罪者たちは、その日、キリストのみ名による救いが与えられていることを聞いていた。少なくとも一人は、提供されているその許しと恵みをほとんど受け入れる気持ちになっていた。……

訴訟が〔カイザル〕の裁判に移された今、フェストやアグリッパの管轄権の及ばないものとなった。しかし、2年後その日の訴訟の結果は神のみ事業にとっても尊い命を救ったのである。フェストはローマの正義の理由で彼自身の判決は宮の保護者によるユダヤ人の見解によって支持されているとし、皇帝に囚人に対して何の合法的な告訴も見出すことができないと述べた手紙を送った。そしてネロは、残酷で悪徳であったが、ルシヤ、ペリクス、フェスト、またアグリッパが無罪を宣言し、サンヒドリンでさえも罪に定めることができなかった者をあえて処刑しなかった。(パウロの生涯からのスケッチ 259-261)

8月27日

アリストアルコの親切

「さて、わたしたちが、舟でイタリアに行くことが決まった時、パウロとそのほか数人の囚人とは、近衛隊の百卒長ユリアスに託された。そしてわたしたちは、アジヤ沿岸の各所に寄港することになっているアドラミテオの舟に乗り込んで、出帆した。テサロニケのマケドニア人アリストアルコも同行した。」（使徒行伝 27:1, 2）

アドラミテオはアジヤの地域の西海岸に位置していた。従って旅人たちはその都市行きの船では、彼らの旅の一部しか果たすることができなかった。しかし、船が着くさらに大きな港のいくつかにおいては、ローマまで乗船することができる船を見つけることができる可能性があった。

紀元一世紀には、海の旅も陸の旅も現在より多くの困難と危険がつきものだった。船の構造と航海の技術は今のようには発達していなかった。船員たちは太陽や星によって航路を定めた。だから太陽や星が出ておらず、また嵐の兆候があるときには、彼らは大海原に自分たちの船を出すことを恐れた。

使徒の船がカイザリヤを発ったときには、安全な航海の時期はもうずいぶん前に過ぎており、その年の船旅が閉じる時期は早々に迫っていた。日々の遅れは航海の危険を増した。しかし普通の旅人にとっても難しく危険な旅は、囚人としての使徒にとって二倍辛いものであった。ローマの兵士たちは命をかけて自分たちの囚人の安全を守るよう責任が負わされており、その結果として囚人の右の手首を兵士の左の手首に鎖でつなぐのが習慣となったが、兵士たちはお互いに交代した。そのように使徒は自由な動きをとることができなかったばかりか、最も性に合わない、まったく嫌悪感を催させる性質の者たち、無教養で精錬されていないばかりか、彼らを取り囲んでいた道徳を乱す影響によって残忍になり堕落した者たちとの間近な絶え間ない接触のうちに置かれていたのである。この習慣はしかしながら、船上においては囚人が陸上にいるときほど、厳しく守られていなかった。ある一つの事が彼の運命の苦難を和らげた。彼はルカとアリストアルコと交わりを許された。後に彼は、コロサイ人への手紙の中に後者について、「一緒に捕らわれの身となっている」（コロサイ 4:10）と言っている。しかしアリストアルコがパウロと共に捕らわれの身になり、苦難の中にあるパウロに仕えたのは、彼のパウロに対する愛情のゆえであり、自ら進んでそうしたのである。（パウロの生涯からのスケッチ 261-262）

8月28日

暴風に揺らされた船に乗る

「幾日ものあいだ、太陽も星も見えず、暴風は激しく吹きすさぶので、わたしたちの助かる最後の望みもなくなった。」(使徒行伝 27:20)

太陽も星もない空の下をただよい、無力で望みもない一四日の間、憂鬱な無気力が300人の人々の上に臨んだ。彼らは調理する手段もなければ、火をおこすこともできず、調理器具は洗い流されてなくなってしまう、ほとんどの食料品は水浸しになり腐っていた。事実、彼らの上等な船は嵐と格闘しており、波は死と語っていたので、だれも食べ物を望まなかった。

その恐ろしい光景のただなかで、使徒は冷静と勇気を保っていた。肉体的には彼らのうちで最も苦しんでいた者であったにもかかわらず、暗黒の時に望みの言葉を語り、緊急のたびに助けの手を差し伸べた。この試みのときにおいて、彼は信仰によって無限の力のみ腕をつかみ、彼の心は神に支えられ、周囲の陰鬱のただなかにおいて彼の勇気と魂の高潔さは最も輝かしい光沢を放っていた。周囲にいるすべての者たちがただ速やかな減びを待っていたとき、この神の人は潔白な良心の平穩のうちに、彼らのために熱心な嘆願を注ぎだしていた。

パウロは自分自身のためには恐れることはなかった。彼は飢えた水に飲みこまれることはない確信していた。ローマで真理のための証をするために、神が彼の命を保って下さるのであった。しかし彼の人間としての心は周囲の哀れな魂に同情して思いやった。罪深く、墮落していたが、死ぬ準備ができていない者たちのために、彼は彼らの命を助けてくださるように熱心に嘆願した。彼の祈りが聞かれたことが示された。嵐が一時的に静まり、彼の声が聞こえるようになったとき、甲板に立ち上がって言った、「皆さん、あなたがたが、わたしの忠告を聞きいれて、クレテから出なかつたら、このような危害や損失を被らなくてすんだはずであった。だが、この際、お勧めする。元気を出しなさい。舟が失われるだけで、あなたがたの中で生命を失うものは、ひとりもないであろう。昨夜、わたしが仕え、また拝んでいる神からの御使が、わたしのそばに立って言った、パウロよ、恐れるな。あなたは必ずカイザルの前に立たなければならない。たしかに神は、あなたと同船の者を、ことごとくあなたに賜わっている。だから、皆さん、元気を出しなさい。万事はわたしに告げられたとおりに成って行くと、わたしは、神かけて信じている。われわれは、どこかの島に打ちあげられるに相違ない」(使徒行伝 27:21-26)。この言葉に再び希望がよみがえった。(パウロの生涯からのスケッチ 266, 267)

8月29日

黒くうねる大波の中での危難

「その時、水夫らが舟から逃げ出そうと思って、へさきからいかりを投げおろすと見せかけ、小舟を海におろしていたので、パウロは、百卒長や兵卒たちに言った、あの人たちが、舟に残っていなければ、あなたがたは助からない。」(使徒行伝 27:30, 31)

猛り狂う嵐の最中に、船員たちは海岸の波浪の轟音(ごうおん)を聞き分け、陸に近いことを報告した。……今彼らは岩だらけの岸に乗り上げるという新しい危険におびやかされた。彼らは直ちに四つの錨を下ろした。それはすることができるとのことであった。その夜の残る時間中彼らは、すぐに彼らの最後が来るかもしれないと知りながら待った。漏れはやむことなく増しており、錨が下ろされているにもかかわらず、船は今にも沈みそうであった。

ついに雨と嵐を貫いて薄明かりが彼らのやつれ青ざめた顔を照らした。嵐の吹きすさぶ海岸線をぼんやり見ることができたが、見慣れた陸地の目印は何も見えなかった。利己的な異教の水夫たちは船と船員を捨てて、やつとのことで船に引き上げたボートに乗って自分たちを救おうとした。船の安全を保持するために更なることをすることができるかのように見せかけて、彼らはボートを解き、海に下ろし始めた。もし彼らが成功していたなら、彼らは岩に衝突してばらばらになり、船上のすべての者たちは沈んでいる船を操作することができないことによって死んだであろう。

ちょうどその時、パウロは彼らの卑劣な計画を見破って、危険を防いだ。彼のいつもの素早い行動力と勇気によって、彼は百卒長と兵士たちに「あの人たちが、舟に残っていなければ、あなたがたは助からない」と言った(使徒行伝 27:31)。使徒の神を信じる信仰は揺れ動くことがなかった。彼は自分の保護については何の疑いもなかったが、船員たちにとっての安全の約束は彼らの義務の遂行を条件としていた。兵士たちはパウロの言葉を聞いて、すぐにボートの綱を断ち切って、海に落ちていくまに任せた。

船上にいるすべての者たちの技能と勇気と平静さが試される最も重大な時がまだ彼らの前にあった。もう一度使徒は励ましの言葉を語り、すべての者たち、水夫と乗客たちに食物をとるように懇願した。……

疲れ、ずぶ濡れになり、意気消沈した 276 人の群集は、パウロがいなければ絶望し、自暴自棄になっていただろうが、今新たな勇気を得て、14 日間ぶりの初めての食事において使徒に加わったのであった。(パウロの生涯からのスケッチ 267-269)

8月30日

難破船！

「ところが、潮流の流れ合う所に突き進んだため、舟を浅瀬に乗りあげてしまって、へさがめり込んで動かなくなり、ともの方は激浪のためにこわされた。」（使徒行伝 27:41）

パウロと他の囚人たちは、こんどは難破より恐ろしい運命におびやかされた。兵士たちはこの危機において、囚人たちを監視するのは不可能であることがわかった。みな自分のみを救うだけで精一杯であった。だがもし囚人のだれかが行方不明になれば、その責任を持っていた者たちは、罰として命を取られるのである。だから兵士たちは囚人たちを全部殺してしまいたいと思った。ローマの法律ではこの残虐なやり方が認められていた。この提案は、兵士と囚人たちが一緒に恩義を受けていたパウロがいなかったら、即刻実行されていただろう。百卒長のユリアスは、パウロのおかげで船の全部の人たちの生命が助かったことをみとめ、彼が殺されることを許すことは最も卑劣な忘恩であると感じた。その上、主が彼と共におられることを確信していたので、パウロに害を加えることを恐れた。そこで彼は、囚人たちの命を助けるように命じ、泳げる者は海に飛び込んで陸に行くように指示した。その他の者は、板や舟の破片をつかんで、波によって陸に運ばれた。……

難破船に乗っていた者たちは、マルタ島の土地の人々に手厚くもてなされた。雨が降ったので、仲間の全ての者は濡れて震えており、島の者たちはしばで大きな火をたいて、そのありがたい暖に皆を招いた。パウロは、燃料を集めることにおいて最も尽力した人々の中にいた。彼が火に棒切れの束をくべたところ、急に熱気のためにまむしが眠りから覚まされ、束から素早く出てきて彼の手にかみついた。これを見ていた人々は恐怖におそわれ、彼の鎖を見て、パウロが囚人だとわかり、人々は互いに言った、「この人は、きっと人殺しに違いない。海からはのがれたが、ディケーの神様が彼を生かしてはおかないのだ」（使徒行伝 28:4）。ところがパウロはまむしを火の中に振り落として、なんの害も被らなかった。人々はまむしの有毒性を知っていたので、パウロが今にも倒れて、苦しみだすだろうとしばらくの間一心に見守っていた。しかし、不快な結果が起らなかったで、彼らはルステラの人々のように考えを変えて、「この人は神様だ」と言い出した。この状況によって、パウロは島の人々に強い感化を得て、彼らを福音の真理を受け入れるように導くことにおいてそれを忠実に用いようとしたのである。（パウロの生涯からのスケッチ 269-271）

マルタでの奉仕

「その場所の近くに、島の首長、ポプリオという人の所有地があった。彼は、そこにわたしたちを招待して、三日のあいだ親切にもてなしてくれた。たまたま、ポプリオの父が赤痢をわずらい、高熱で床に横たっていた。そこでパウロは、その人のところには行って祈り、手を彼の上においていやしてやった。このことがあってから、ほかに病気をしている島の人たちが、ぞくぞくとやってきて、みないやされた。彼らはわたしたちを非常に尊敬し、出帆の時には、必要な品々を持ってきてくれた。」(使徒行伝 28:7-10)

三か月のあいだ船の同乗者たちはマルタ島に滞在した。パウロと彼の共労者たちはその間、幾度も機会を捕らえて福音を説いた。主はすばらしい方法で彼らに働きかけられた。パウロのために、難破船の同乗者たち全員が手厚くもてなされ、彼らの必要なものはみな支給されて、マルタを出発するときには、航海に必要なものがことごとく惜しみなく用意されたのである。(パウロの生涯からのスケッチ 271)

あなたの最も手近にある働きをなささい。それが伝道地における危険や困難のただなかにあろうとも、なしなさい。しかし、あなたにお願いする。困難と自己犠牲について不平を言うてはならない。……わたしたちはこの生涯において報いを受けることを期待して働くのではなく、わたしたちの目を走るべき行程の終わりにある賞にしっかりとめて働くべきである。今日、磁石が南北を指すようにその義務に忠実な男女、道が平坦にされ、すべての障害物が除かれなくても働く男女が必要とされている。(教会への証 5 巻 406)

もし真理を知っているすべての者たちが、機会の差し出されるときにこの働きをしっかりとつかみ、自分たちが住んでいる近隣で小さな愛の行為を日々になすならば、キリストが彼らの隣人に表されるであろう。福音は狡猾に考案された物語や意味のない推測としてではなく、生きた力として現されるのである。それは空想や熱狂の結果ではなく、事実として現されるのである。これは説教や公言や教義よりももっと重大になるのである。(同上 6 巻 264)

心身の病から失望している人の前に、たえず大医師であるキリストを置くべきである。肉体の病氣も精神の病もいやすことができるキリストをその人々に示しなさい。病弱をあわれみたまうキリストについて知らせ、永遠の生命が得られるようにとご自分の生命をお与えになったキリストの保護の中に自らをまかせるように励まし、キリストの愛を語り、その救いの力を知らせなさい。……肉体的な要求を満たすことが彼らに近づきうる唯一の道となる場合がある。(ミストリー・オブ・ヒーリング 115, 116)

研究 4

神の憐れみの最後の招き



「信仰による義認とは何か？」

「信仰による義認のメッセージは、第三天使のメッセージか・・・わたしは答えた、『それこそ、まさに第三天使のメッセージそのものである』と」(レクティド・メッセージ 1 巻 372)。

これが、この第三天使のメッセージを伝えてきた預言者の証です。

それでは、メッセージそのものである信仰による義認とは、何でしょうか。

信仰による義認とは何か？

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ 1:29)。

「あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでた。そしてそれを見て喜んだ」(ヨハネ 8:56)。

アブラハムからキリストまでは、実に 42 代ありました(マタイ 1:17)。しかし、アブラハムはキリストの「この日を見ようとして楽しんでた」。彼はそれをどこで見たのでしょうか？

「この時アブラハムが目をあげて見ると、うしろに、角をやぶに掛けている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行ってその雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭としてささげた」(創世記 22:13)。

「信仰による義認とは何か。それは人の栄光をちに伏させ、人が自分のために自分の力ではできないことを、人のためになしてくださる神のみわざである。自分自身が無であることを人が知るとき、キリストの義の衣で覆われる準備ができる」(信仰によってわたしは生きる 111)。

すなわち、自分の栄光を大事にする人は受けることのできない、見ることのできないメッセージなのです。

自分の栄光とは何でしょうか？自分の栄光を誇った昔のバビロンの王の経験

を見てみましょう。

「王は自ら言った、『この大いなるバビロンは、わたしの大いなる力をもって建てた王城であって、わが威光を輝かすものではないか』」（ダニエル 4:30）。

彼は警告を受けていたにもかかわらず、「わが栄光」のために依然として同じ生活を送ったため、獣になりました。わが栄光は、栄光ではなく、ちりに伏させられるべきもの、すなわち、死なすべきもののなのです。

同じように、ラオデキヤの問題は何でしょうか。

「あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついて」おらず、「自分は富んでいる。豊かになった、なんの不自由もないと言っている」（黙示録 3:17）。

実は、「みじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者である」ことは、「富む者と」するために「火で精錬された金」「白い衣」「目にぬる目薬」をもっておられるお方には本当の問題ではありません。「自分は富んでいる。豊かになった、なんの不自由もないと言っている」ことが問題なのです。

イエスは、この状態を「口から吐き出したい」と言われます。

「見よ、その魂の正しくない者は衰える（自分を高めている魂は、彼のうちに正しくない：英語訳）。しかし義人はその信仰によって生きる」（ハバクク 2:4）

高めるとは、大きな野望ばかりを指すものではありません。目立とうとする、注目を集めようとする一つ一つの小さく見える行為が、その精神の表れです。それらが地に伏させられない限り、つまり無くならない限り、人は神の義を受けようとしません。

では、神のみわざであるということは、どのようにわかるでしょうか？

それは信仰によって義と認められることによってです。

なぜ人にはできないか。－それは神のみわざである

「それは、どんな人間でも、神のみまに誇ることがないためである」（コリント第一 1:29）。

「主はこう言われる、『おおよ人（自分）を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、その心が主を離れている人は、のろわれる』…」（エレミヤ 17:5）。

自分にできないから人に頼むという人は、自分ができるなら頼みません。

「成功するか否かは、あなたが今持っている能力とか、または、将来の能力によるものではない。それは、主があなたのために何をなし得るかということによる。わたしたちは、人間のできることには、信頼をおかないで、信じるすべての魂のために、神がおできになることにもっとも信頼をおかなければならない。神は、あなたが信仰によって、神にたよることを望んでおられる。神は、あなたが、神に大きなことを期待することを望んでおられるのである。神は、霊的のも

のと同様に、この世のものに対する理解をも与えようと望んでおられる」(キリストの実物教訓 125)。

これを学んだのがモーセでした。

エジプトからヘブル人を救う器として選ばれていたモーセが、エジプトで学んだのは「人間に何ができるか」でした。しかし、神がモーセをお用いになることができるためには、彼はそれを忘れなければなりませんでした。

「モーセは、忘れなければならないものがたくさんあった。…これらの印象をとり去ることができるのは、時間と環境の変化と、そして、神との交わりであった」(人類のあけぼの上巻 283)。

これを学んだモーセはどのように証したでしょうか。

出エジプト記 3:7-4:13 を読みますと、神がモーセを召されたときのことが記されています。ここでの彼の告白は、「自分はできません」ということでした。しかし、それと同時に、「わたしはあなたの口と共にあり」と神ご自身が実現なさることを約束されたとき、彼はそれを受け入れ、神に用いられる者となりました。これが、神の教育の結果です。

「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」(ピリピ 2:13)。

同じように神に召されても、信仰によるか、すなわち神により頼んでいるのかどうかによって結果は全く違います。例えば、同じように「出て行くように」命じられたアブラハムと、400 年後のイスラエルはどうだったでしょうか。信仰がなく、12 人の斥候を送った結果、カナンには入れなかったヘブル人に対して、「信仰によって、・・・受け継ぐべき地に出て行けと召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った」アブラハムには、「神は・・・都を用意されていたのである」(ヘブル 11:16)。

われらが神はおできになる・・・これが信仰

では、彼は何を信じたのでしょうか。

「そして主は彼を外に連れ出して言われた、『天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみなさい』。また彼に言われた、『あなたの子孫はあのようになるでしょう』。アブラムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた」(創世記 15:5-6)

彼の信仰は、質問しない信仰、見ないことを信じる信仰でした。神はこれを彼の義と数えられた (he counted it to him for righteousness) とあります。

数えられる (Counted)、これは「自分の通帳に記される」ことを意味します。

つまり、自分の通帳が 0 円であれば、神の義が書き込まれるのです。

2018/8/1	0		0
2018/8/2		1,000,000,000,000,...	1,000,000,000,000,...

書き込まれるためには、自分の通帳は0でなければなりません。何千分の一であろうと、何かが残っているなら、すなわち、何か自分に頼り、誇ろうとするものが残っているなら、書き込まれることはありません。

「それでは、肉によるわたしたちの先祖アブラハムの場合については、なんと言ったらよいか。もしアブラハムが、その行いによって義とされたのであれば、彼は誇ることができよう。しかし、神のみまえでは、できない。なぜなら、聖書はなんとやっているか、『アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた』とある。いったい、働く人に対する報酬は、恩恵としてではなく、当然の支払いとして認められる。しかし、働きはなくても、不信心な者を義とするかたを信じる人は、その信仰が義と認められるのである」(ローマ 4:1-5)。

「『わたしは、あなたを立てて多くの国民の父とした』と書いてあるとおりである。彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神(創造主)を信じたのである。… すなわち、およそ百歳となって、彼自身のからだが生んだ状態であり、また、サラの胎が不妊であることを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかつた。彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強められ、栄光を神に帰し、神はその約束されたことを、また成就することができると確信した。だから、彼は義と認められたのである。しかし『義と認められた』と書いてあるのは、アブラハムのためだけではなく、わたしたちのためでもあって、わたしたちの主イエスを死人の中からよみがえらせたかたを信じるわたしたちも、義と認められるのである」(ローマ 4:17-25)。アーメン。

信仰による義認とは、有ったものの改善ではなく、無かつたものを存在させることです。すなわち、創造主のみわざです。「神はおできになる」と確信すること＝これが信仰です。これが、第三天使のメッセージを信じる結果である「イエスの信仰」なのです(黙示録 14:12)。

この信仰の証を見てください。

「もしそんなことになれば、わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されます」(ダニエル 3:17)。

「神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起すことができるのだ」(マタイ 3:9)。

「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、

彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル 7:25)。

「わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである」(ローマ 8:38, 39)。

「わたしは自分の信じてきたかたを知っており、またそのかたは、わたしにゆだねられているものを、かの日に至るまで守って下さることができると、確信しているからである」(テモテ第二 1:12)。

「『主よ、わたしの僕が中風でひどく苦しんで、家に寝ています』。イエスは彼に、『わたしが行ってなおしてあげよう』と言われた。そこで百卒長は答えて言った、『主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません。ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下にも兵卒がいて、ひとりの者に「行け」と言えば行き、ほかの者に「こい」と言えばきますし、また、僕に「これをせよ」と言えば、してくれるのです』。イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた人々に言われた、『よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない』」(マタイ 8:6-10)。

この百卒長は、「主よ、どうぞ、ご足労くださいませんように。・・・自分でお迎えにあがるねうちさえないと思っていたのです」と言いました(ルカ 7:1-10)。自分が無であることを知っていましたが、自分の善を頼りにはしていませんでした。「イエスはおできになる」ことに完全により頼んでいたので。

「わたしがローマの権力を代表し、兵士たちがわたしの権威を最高のものとしてみとめているように、あなたは無限なる神の権力を代表しておられ、つくられたものはすべてあなたのみことばに従っています。あなたが病気に去れとお命じになれば病気はあなたの仰せに従います。あなたが天の使者たちをお呼びになれば、彼らはいやしの力をさげます。ただみことばを語ってくだされば、それでわたしのしもべはいえるのです。・・・彼は、信仰によって、キリストの真の性格をとらえた」(各時代の希望中巻 29, 30)。

「これと同じようにすべての人間が、キリストに行くことができる。『わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け』(テトス 3:5)。あなたは自分が罪びとだから神から祝福を受ける望みがないとでもお思いになるだろうか。キリストは罪びとを救うためにこの世においでになったのだということを覚えなさい。自分自身を神に推薦するようなものは何もない。わたしたちがいつも訴えることのできる願いは、キリストのあがないの力を必要としている自分の完全に無力な状態である。わたしたちは、自己信頼の

念をいっさい捨てて、カルバリーの十字架をながめ、『わが手には何も価値あるものをもたず、ただ、なんじの十字架にすぎただけである』とすることができる。

『信ずる者には、どんな事でもできる』(マルコ 9:23)。わたしたちを天とつなぎ、暗黒の力に抵抗することができるようにするものは信仰である。すべての悪い素質にうち勝ち、どんなに強い誘惑にも抵抗する方法を神はキリストによってお備えになった。しかし多くの人は、自分が信仰がないような気持がするので、キリストから離れている。こういう人々は、無力、無価値なままで、情深い救い主のあわれみに全く頼りなさい。自分を見ないでキリストを見なさい」(ミストリー・オブ・ヒーリング 40)。

そうです、自分自身が 0 円であることを認めるとき、キリストに全くより頼んで、自分からキリストへ目を転じなければなりません。それが本当に 0 円であることを認めることであり、信じることなのです。

「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた。・・・主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである」(詩篇 33:6, 9)。

「信仰は神の約束をわがものとし、従順という実をむすぶ。・・・真正の信仰は聖書の約束と条件とを土台にしている」(各時代の希望上巻 141)。

しました。

「ダビデの子に、ホサナ」

「主の御名によってきたる者に、祝福あれ」(マタイ 21:9)。

「見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得」(ゼカリヤ 9:9)。

役人たちは子どもたちの喜びの声をだまらせようとしたが、すべての人はイエスさまのすばらしいみわざのために喜びと賛美で満ちていたので、だまろうとはしませんでした。

役人たちは彼らに止めるよう命じてくれることを期待して、救い主に向き直りました。彼らはこのお方に言いました。「あの子たちが何を言っているか、お聞きですか。」

イエスさまは答えて言われました。「そうだ、聞いている。あなたがたは『幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた』とあるのを読んだことがないのか」(マタイ 21:16)。

キリストの誕生を告知らせ、地上におけるこのお方の働きを促進するという祝福された特権は、民のごう慢な役人たちに拒否されました。

このお方の讃美がひびかなければなりません。ですから、神さまはそうするために子どもたちを選ばれたのです。もしこれらの喜ぶ子どもたちの声が沈黙させられたら、宮の柱そのものが、救い主の讃美を叫び出したことでしょう。

ラタトゥユ

■材料〈4人分〉

トマト 2個
Aズッキーニ 1本
Aピーマン 2個
Aたまねぎ 半分
Aナス 2本

Bオリーブオイル 大4(大さじ4)

Bにんにく 1片

Cローリエ(好み) 1枚

C塩 小1(小さじ)

■作り方

1. Aの野菜は一口大に切る。にんにくはみじん切り、トマトはヘタを取り湯むきをして一口大に切る。(トマトの皮が気にならなければ湯むきの必要はありません。)
2. フライパンにBをを入れ、弱火にかけ香りが立ってきたら、中火にしAを入れ炒め合わせる。
3. しんなりしてきたらトマトとCを加え混ぜフタをする。
4. 煮立ったら弱火にして10-15分程に煮込む。フタをとり中火にし、水気がなくなるまで5-10分煮る。

＊野菜に塩を加えることで、浸透圧により野菜から水分が出てきます。

最後に水分をとばすことで旨みがギュッと凝縮されます。

色々な野菜を入れて好みでアレンジしてもおいしいです。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教：11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先：〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱13号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

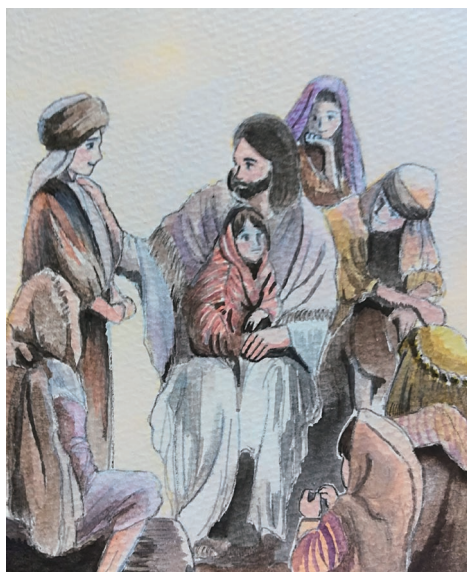
第29話

「これらのものを持って、
ここから出ていけ」(II)

彼らはさすがのように、キリストのお顔にじっと目を向けました。売り買いする人々を追い出された厳しさを見るのではないかと恐れていましたが、彼らがこのお方のお顔に見たのは愛と優しい同情だけでした。

イエスさまは親切に病人を受け入れてくださいました。そして病氣や苦しみは、この方の手が触れると逃げ去るのです。このお方は優しく子どもたちをご自分の腕の中に集め、むずがる彼らの泣き声をなだめ、彼らの小さな体から病氣と痛みを追い出され、そしてほほえみ、元気になった子供たちを母親の手に返されたのです。

祭司と律法学者が用心深く宮に戻ってきたときに、なんとという光景が、彼らを迎えたことでしょう。彼らは神をたたえる男や女、子どもたちの声を聞きました。



彼らは病人がいやされ、盲人の視力がもどり、耳の聞こえない人が聞こえるようになり、びっこをひく人が喜んで飛びはねているのを見ました。

子どもたちがこれらの喜びを先導しました。彼らは前日のホサナをくり返し、そしてシュロの枝を救い主の前にふりました。宮は彼らの叫び声に反響をくり返

(45 ページに続く)